

2003 年 梅子杯 総括コメント

予選審査員：ナカオシュンスケ

I. 予選審査の大前提

(ア) 予選審査員の役割

これまで多くの大会において、予選審査員というものは A4 一枚の Judging Sheet の中に数行のコメントを記すに過ぎず、各 Speaker はなぜ自分の Speech がこのように評価されたのかということを知ることができませんでした。これは、落選者と当選者の双方にとって不幸なことです。予選で惜しくも落選してしまった Speaker は、自分の Speech の弱みを最後まで知ることができずに、往々にして他の大会でも落選を重ねます。逆に、予選を通過した Speaker は自分の Speech の強みと弱みが何であるかを把握することができないので、ほとんどの場合、大して書き直しもしないで本選にのぞみます。しかし、こうした努力の怠りは、本選審査員にこき下ろされるという最悪の結末になって自分の身に降りかかってくるのです。

私は予選審査員の最大の存在意義は「教育」にあると思っています。落選してしまった者には次の大会で当選するためのヒントを与え、当選した者には優勝に向けて何を準備すべきかを認識させる。これこそが予選審査員の腕の見せ所であり、醍醐味であると思っています。

ただ、大変申し訳ないことに、今回の梅子杯では合計で 48 通もの応募があり、私の仕事との関係から満足のいくようなコメントを書いている時間がなかったのが事実です。そこで、予選を通過されて方の中で、追加でコメントをもらいたいという人がもしもいれば、下記のアドレスまで原稿を送ってくだされば何とかご対応させていただこうと思っています（先着順になる可能性も大です）。

- Mail to: drunkonspeech@infoseek.jp

なお、時間との関係から、残念ながら予選で落選してしまった方への追加コメントはできません。なぜ落選してしまったのか、その背景には何があるのかを知りたい方は、下記のアдресで私の Speech に対する考え方を公開させていただいていますので何かの参考にしてください。なお、当 Web サイトを管理している方は私ではありませんので、その点は誤解のないようにお願いします。

<http://www.theirfinesthour.net/50ways/>

II. 多くの Speech に共通して見られる不足点

(ア) タイトルの各語の先頭は大文字が基本

こんな基本的なことを予選審査のコメントで言わなくてはならないのは大変残念ですが、半数以上の Speech のタイトルで大文字・小文字のミスがありました。

例えばあなたが“Remember It Is A Crime”というタイトルの Speech を作ったとしましょう。原則的には次のような表記がタイトルとして正式なものとなります。

Remember It Is A Crime
REMEMBER IT IS A CRIME

逆に下記のようなものは正式なものではありません。

Remember it is a crime

前置詞や不定冠詞などによっては小文字でもかまわないものがあるので、その点は各自で注意してください。

このようなタイトルミスは普通の ESS であれば、学内予選のときに当然注意されてしかるべき問題です。ですから、このような単純ミスを犯したまま予選審査に原稿を送ってくる人の出身 ESS は、かなりレベルの低い集団だと思われるても仕方がありません。もしも今回間違えて送ってしまった人は、今後はこのようなことのないように各自の ESS 内でフィードバックをお願いします。

(イ) 今期連発の Topic

今年はこの梅子杯の他に、慶應義塾大学の福澤杯の予選審査も担当させてもらいましたが、次の二つの Topic が各々 10 本ほど連発しており、ほとんど嫌気がさしてしまいました。

Internship
Medical Malpractice

中には評価すべき論述を行っていた Speech もありましたが、今期だけでこれだけ同じ Topic が連発されてしまうと、個別の Speech がそこそこ良くても、総じて全体の印象は悪くなります。さらに、もしも本選で同じ Topic の Speech が 2 本も 3 本も出るようなことになると、まずその Topic で優勝する可能性は低くなります。みなが安直に志向するような可能性がある Topic を選ぶ際には、自分の意見にそれ相応の Originality があるかどうかを再度検証してみてください。

(ウ) 反対の主張の合理性を常に検証する

自分が問題提起している内容に対して、一部の聴衆が異議を唱えるのではないかということは、Speaker が常に念頭においておく必要のある事柄です。その上で、どうフォローしても多くの人々が自分の主張が受け入れない可能性があるということがわかったら、相手の主張を上回るための追加の考え方を盛り込むか、その主張自体を取り下げってしまうかを決めなくてはなりません。そのためにも、自分の主張と正反対の主張を頭の中に思い描き、常にその合理性について考える必要があるのです。

「卒業後 3 年以内に会社をやめる人間が 30%にも上ることは、日本経済を衰退させる」

これは、今期連発した”Internship”の Speech の冒頭で必ず述べられていた主張です。そこで、

「卒業後 3 年以内に会社をやめる人間が 30%にも上ることは、日本経済を衰退させない」

という主張を考えてみましょう。

この考え方は全く不合理なものでしょうか。私はそうは思いません。このままこの会社にも、ろくなキャリアを積むことはできないと判断して、早めに新たなフィールドに挑戦する人が増えてきたということはむしろ歓迎すべきことではないでしょうか。例えば、日本の大銀行に就職した若者が、その腐りきった組織に落胆して新たなキャリアを求めて果敢に転職していくような社会と、大銀行の看板に甘え、ただなんとなくそこに居座り続ける若者が多い社会と、どちらがまともな社会といえるでしょうか。こう考えると、必ずしも 3 年以内に職を辞める人が 30%に上ることが、日本経済の衰退につながるとは限らないという意見にも一理あるということがわかると思います。

このように、自分と全く反対の主張にも一定の正当性が認められるのではないかを常に検証することが大切です。そして、反対の主張にも理があると感じた際は、それではどのような主張を追加することによって反対の主張を上回ることができるのかを考えなくてはなりません。もしもそれができないのであれば、その主張は取り下げたほうが無難なのです。

(工)聴衆を脅しても何の意味もない

これまた多くの Speaker に共通して見られる点ですが、聴衆に脅しの文句を投げかけて自分の主張を納得させようとするのは浅はかです。

「もしもあなたの家族がこの病気にかかったら」

「もしもあなたの恋人が犯罪に巻き込まれたら」

「もしもあなたが 50 年後に老人になったら」

.....

バリエーションをあげだしたら枚挙に暇がないほど Speaker は安直に脅し文句を聴衆に投げかけています。しかし、そのほとんどが現実性のない、不愉快なものばかりです。大体、自分の恋人が犯罪に巻き込まれたところを想像させようとするなんて、倫理観に欠いていると思いませんか。

よく考えてみてください。仮にあなたの主張が非常に深刻な問題に直結していて、それが非常に納得のいくものであれば、わざわざ聴衆を脅さなくても聴衆は自然と物事の重大性を認識してくれます。逆に、自分とはほとんど関係ないと思われる事象に対して安易な脅しをかけられたら、不愉快感だけが残し、その効果はプラスどころかマイナスに転じてしまいます。

小さな犬ほどキャンキャン吠えて相手を脅かそうとするのと同じで、ごくごく可能性の低い仮定を想定して、それに巻き込まれることを想像させるのは、自分の意見をストレートにぶつけても相手が納得してくれる自信がないからではないでしょうか。ですから、脅し文句などにスペースを割いているくらいなら、自分の主張を補強することに余白を充てるほうがよほど意味のあることなのです。

(オ)自分が出来もしないことを主張してはいけない

自分が出来もしないことを声高に叫び、相手を説得させようとするほど愚かなことはありません。例えば、野球を一回もやったことがない人間が草野球の試合を見て、「バッティングのフォームがなっていない」などと冷笑しているようなものです。聴衆はそのような根拠のない主張に納得することはありません。

同じように、就職活動をやったこともない学生から、「個人の適性にあった職を得るにはこうすべきだ」と息巻いて言われても、何の説得力もありません。就職活動の難しさや苦勞を知らない人間が何を偉そうに言っているのだと反感だけが残ってしまいます。

自分が出来もしないこととはすなわち、自分が経験したことがないことです。例えば今回は、社会に出て働いたこともない学生達から、「3 年くらいではろくな専門性は身につかない」、「医者を論理的に説得しなくてはならない」などというまことしやかな主張が多々述べられており、辟易としてしまいました。自分は今までどんなことをやってきたのかを振り返りながら、自分が自分の主張に足りうるバックグラウンドを持っているかを常に思い起こす必要があると思います。

(力)Speech で自慢をするほど下品なことはない

その昔、母校の ESS のキャンプで重鎮 OB の一人が、「Speech の中で自慢をすることほど恥ずかしいことはない」と言っているのを聞いて、本当にそんなことをする奴がいるのかと疑問に思ったことがありました。ところが今回の予選審査でそういう Speech に何本が遭遇することになり、私からも注意させていただきます。

「自分は頭が良い」
「自分の父は偉大だ」
「私の彼氏はかっこよくて優しくて最高！」
...

当日初めて出会った何百人という聴衆の眼前で、こういう自慢を平気でやってのけてしまう人の欠点は、自分では自慢をしているという意識がまるでないということです。当人はアメリカンジョークのつもりでやっているようなのですが、これほど面白くないジョークは他にはないでしょう。確かな根拠があって自慢しているのならともかく、それが無いのであれば周りから見れば迷惑以外の何者でもありません。

仮にあなたが男だとしたら、同期の女性は飲み会であなたの隣にだけは絶対に座りたくないと思っていることでしょう。それどころか、2 次会のカラオケにあなたがついてこないように、何とかしてあなたをまくことができないか知恵を絞っていることでしょう。仮にあなたが女だとしたら、あなたが授業を受けている間、部室ではあなたの陰口が叩かれまくっていることでしょう。それどころか、あなたの彼氏まで同罪扱いされて、いずれ部から二人まとめて追い出されることになるでしょう。

Speech というものは非常に礼節が重んじられる世界です。普段は大勢の人前で話すチャンスがないからと、ここぞとばかりに自慢を繰り広げることくらい恥ずかしいことはありません。ましてや本場の外国人の前でこれをしてしまったら、あなたの信用は二度と回復することはないでしょう。重々気をつけてください。

III. おわりに

(ア) オセロの時代への期待

皆さんご存知の通り、オセロでは黒と白の石が使われます。両側から相手の石をはさむと、はさまれた石は裏返って自分の色になります。ここに黒の石が6つ並んでいるとしましょう。その端に白い石が一つだけあって、次の順番が白側に回ってきました。何も知らない人にとっては、6対1で圧倒的に黒が有利に見えるでしょう。しかし、1つの白い石を置いて両側から黒をはさむと、すべての石が一気に白に変わってしまうのです。

今回の梅子杯では合計48通の応募がありました。その中の数本のSpeechは近年稀に見る素晴らしい出来に仕上がっています。いわゆるESS的な型にはめられたSpeechが溢れかえるなかで、ごく少数ではあっても素晴らしいSpeechが今回登場したことは非常に嬉しく思っています。そして、その素晴らしいSpeechが梅子杯の本選で燦然と輝き、オセロのようにESS界の悪しき常識を覆してくれることを期待しています。是非とも最高の舞台で輝いてください。

みなさんの活躍を祈っています。

長々とありがとうございました。

Speakers are not braver than anyone else.

They are just braver seven minutes longer on the stage.